

小野篁の和歌…和歌の衰微から興起へ

平島 至恩

はじめに

「小野篁と云う人のことは、その名が頭われているわりに、歴史上どんな事跡を残したかと云うことは余り一般に知られていない¹⁾。」
右の一文は谷崎潤一郎が書いた『小野篁妹に恋する事』の書き出しである。これには全く賛成で、小野篁についてはこの『小野篁妹に恋する事』を含め、『篁物語』や冥官伝説といった後世の創作に形作られた虚像の方が有名で実像が十分に伴っていないように思われる。これは学術研究の分野でも同様で、小野篁に関する研究の多くは篁の登場する文学を扱ったものであり、篁の歴史的事跡を扱ったものは少なく、検証も進んでいない。²⁾
本稿では小野篁の和歌について扱うが、これも前述の問題意識に則ったもので、篁本人の和歌から『古今和歌集』が編纂された当時の篁の位置づけを明らかにしようと試みるものであり、未だ多くない小野篁の実像に迫る研究を一步でも進められたら幸いである。³⁾
小野篁の和歌とされるものうち、篁の真作と考えられるものは左の六首である。(高田裕彦 2009 『新版古今和歌集現代語訳付き』角川ソフィア文庫より引用。今後の引用を簡便にするため通し番号を振った。)

1 梅の花に雪の降れるをよめる

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだにほへ人の知るべく

2 隠岐の国に流されける時に、船に乗りて出でたつとて、京なる人のもとにつかはしける

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人にはつげよ海人の釣り舟

3 いもつとの身まかりける時よみける

泣く涙雨と降らなむ渡り川水まさりなば帰りくるがに

4 諒闇の年、池のほとりの花を見てよめる

水のおもにしづく花の色さやかにも君が御影の思ほゆるかな

5 しっかりとてそむかれなくに事しあればまづ嘆かれぬあな憂世の中

6 隠岐国に流されてはべりける時によめる

思ひきや鄙の別れにおとろへて海人の縄たきいざりせむとは

これらの和歌を取り上げる先行研究はおもに作詠時期と語句の解釈が中心で、2の歌について扱ったものが多い⁴⁾。1と6を全て取り上げたものでは平野由紀子 1988 『小野篁集全釈』(風間書房 19・26頁)や小林和彦 1978 『小野篁、その人と和歌…反骨性と屈折性』(北海道教育大学紀要第一部 A 人文科学編 28 巻 2 号 9・23 頁)がある。前者は『篁物語』の研究について書かれたものであり、勅撰歌集に収録された小野篁の和歌十五首のうち、使用された語句や表現の特徴などから前述の六首を篁の作、残りの九首を別人の作と指摘した。後者は『日本文徳天皇実録』に収録された篁の薨伝などをもとに再現された人物像からその和歌の特徴を考察するものである。これは篁の和歌の重要性について大きな示唆を与える一方で、和歌の特質を捉えることが主題であるため、その具体的な内容までは言及されていない。

本稿では篁の和歌の表現の特徴と『古今和歌集』の典型と言われる和歌との比較から篁の和歌の内容を分析することで、『古今和歌集』からみえ

る篁の位置づけを論じ、その和歌の重要性について示す。

二・ 語句と情景

篁の和歌の特徴として、まず使用される語句が具体的であることと、それに伴う鮮明な情景があげられる。例えば1の和歌では「花」「色」「雪」「まじり」「見えず」「香」には「人」「知る」などいずれも実際にその場に存在するもの（「花」「色」「雪」「香」「人」）や、状態（「まじり」「見えず」）を直接的に描写する語であり、装飾的な語彙は見られない。

もう一つ注目したいのが、情景とそこに表れる詠み手の視点である。再び1の和歌を例に挙げると、一句目から三句目にかけて花と雪を視覚的に描写し、四句目でアブローチを視覚から嗅覚に変え、結句で花を愛でる人（詠み手である篁）を登場させている。一句一句読むごとに情景が再現され、結句で篁の感性を追体験するような秀句である。

これらの特徴は他の2、3、6の和歌にも同様に見られる。語句については、2「わたの原」「八十島」「かけて」「漕ぎ出でぬ」「人」「つげよ」「海人」「釣り舟」「泣く」「涙」「雨」「降ら」「渡り川」「水」「まさり」「帰りくる」「4」「水のおも」「しづく」「花」「色」「さやか」「君が御影」「思ほゆる」「5」「そむかれなく」「嘆かれぬ」「6」「鄙」「別れ」「おとろへ」「縄」「たき」「いざりせ」など、名詞では実際に存在するものや架空のものでも明確な形を想起させるもの、動詞では具体的な動作を表す語が目立つ。

次に作者の視点について簡単に和歌の解説も含めながら述べる。

2の和歌の「八十島」はたたくさんの島々と解釈され、いささか抽象的な語に思われるが、篁の配流先は隠岐国であるから、1880を超える隠岐諸島の島々を指していると考えればこれほどふさわしい単語もないだろう。詠み手の篁は今まさにその島に向かって海原を漕ぎだし、それを京の人に伝えよと漁師の舟に向かって呼びかけているわけである。情景の中の距離感としては篁は遠ざかっていくが、その心情は真に迫って感じられるだろう。

3の和歌に表れる情景は1、2の和歌とかわって現実のものではない。「渡り川」とはすなわち三途の川のことである。現実にある自分の涙を架空の世界の雨、そしてそれが降り注ぎ増水する川に繋げて妹が帰ってくることを祈っている。三途の川という仏典に由来する外来的思想を取り入れ、現実の世界と架空の世界を重ねる理知的な構成をした歌ながら、死者の帰還という現実と反する事を願う感情が一層篁の悲しみを感ぜさせる。

4の和歌も3と同様に死を悼む歌である。詞書きにある「諒闇」とは天皇の喪に服す期間であり、「君」とは天皇を指す。しかし深い悲しみに暮れるというよりは水面に映り込む花に生前の御姿を重ねてしみじみ思い出すという歌なので3の和歌より爽やかである。なお、ここで篁が追憶する「君」がどなたかは未だ確証を得ない。

5の和歌はこの中では唯一情景をあまり描写せず、詠み手の内面のことに留まっている和歌である。この和歌には篁の嘆きが明確に表れている。詳細は不明だが何か「事」に際しては嫌な世だと嘆くけれども、「しかりとて」放り出してもできないと歌っているのである。この和歌は他の五首と比べて内向的で、一種諦めのようなものが感じられる。篁はその墓伝などに描かれた人物像から直情的な反骨の士と語られることが多いが、繊細でややネガティブな表現をしたのも確かである。

6の和歌は2の和歌と同じく隠岐国に流された折のものである。ここでの篁は漁師に交じって自ら縄を持ち漁をしている訳だが、篁は初句「思ひきや」で自身の置かれた状況を過去から振り返って（思ってもみなかったことと評している。この「思ってもみなかった」時点は配流前の過去ならいつでも良いのだが、実際に流刑に処されるまでまるきり予想していなかったとはまず考えられない。『続日本後紀』および『日本文徳天皇実録』によれば篁は遣唐使の任務を放棄するという違勅を犯した上、朝廷を批判する旨であろう文を作っている。当時あった死刑廃止の風潮から、死罪は免れると考えるにしても、配流にありう可能性が非常に高いと考えるのが自然だろう。特に篁は『令義解』の編纂に携わるなど法律にも明るかったようであるから、自分の処遇についてある程度の予測は立っていたのではないだろうか。それにもかかわらず、「思ひきや」と表現したのは、流罪にあってもなお、自らの主張が正しいという自信の表れではないか。

三・ 各句の対比

篁の和歌のもう一つの特徴として対比がある。これは1、3、6の全てに見られる特徴で、対比によって情景や心情により深みを持たせている。

1の和歌は、まず花と雪の色に着目し、その同一性を「まじりて見えず」と表している。その後、「香をだにほへ」と香りの有無を利用して花に焦点を当てていく。つまり1の和歌には、花と雪、そしてその視覚的な共通点(色)と嗅覚的な相違点(香りの有無)という対比が含まれている。

2の和歌では「八十島かけて漕ぎ出でぬ」篁と「海人の釣り舟」の対比によって追放にあっての悲壮感が漂ってくる。和歌の中では「八十島」としかさされていないが、先述の通り篁が向かう先は流刑地である隠岐国であって、篁にとってそこへ向かうことは紛れもない非日常である。一方の「海人の釣り舟」は漁師たちの日常の象徴である。京から遠く離れた隠岐に流され、故郷に戻れるかすら不明な篁が、漁が終われば陸に帰って行く漁師の舟に呼びかける光景は配流の哀れの中に悲壮な力強さをみることができている。

3の和歌は現実の世界と架空の世界の対比である。まず和歌の中にみえる対比として現実の涙と空想の雨がある。この二つによって現実世界と三途の川がある死後の世界を繋げて、結句「帰ってくるがに」で再び現実世界に視点を戻しているように見えるが、実際に死者が戻ることはないで、これもまた空想である。しかし妹の死を嘆く篁は現実のものであり、空想の世界の描写が鮮明であるほど死者との隔絶とそれによる篁の切実な悲しみが感じられる。

4の和歌は他の和歌に比べて対比自体は弱いものの、現実には咲く花と水面に映る花、そして「君が御影」の対比がある。推論に過ぎないがこの和歌は宴の中で詠まれたものではないだろうか。小林和彦氏の「法会のあとの、遊宴の気分の漂う中で、そのような雰囲気や背を向けて池畔にたたずみ、先帝の思い出にひたっている」という評に従うならば、現実の花でなく水面に映る花の像に在りし日の御姿を重ねたのは、こういった事情によるかも知れない。

5の和歌は「事あるごと世の中が嫌になる」感情と「だからといってそむくことはできない」という理性的な結論が描かれている。「しかりとて」と結句の内容を先行させているところから篁の葛藤がうかがえる。

6の和歌は「おとろへ」た現在の自分とそういつた状況に陥るとは思いもしなかった過去の自分との対比が見られる。先に述べたように篁はこのとき流罪の原因となった自身の主張を正論だと考えていたのではないだろうか。それにもかかわらず、むしろ正論を述べたために流罪に処され、「おとろへ」た姿は若干自業自得の感があるとはいえず、読んだものの嘆息をさそうだろう。

四・小野小町「花の色は」との比較

二章と三章では篁の和歌の特徴について述べてきたが、次に『古今和歌集』の典型と言われる特徴について触れたい。『古今和歌集』を概するとき、「たをやめぶり」や「技巧的」といった言葉が使われる。その代表として、本稿では小野小町の和歌を引く。(高田裕彦 2009 『新版古今和歌集現代語訳付き』角川ソフィア文庫より引用。今後の引用を簡便にするためAとする)

A 花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

Aの和歌は「花の色はむなしく色あせてしまった世に降り続く長雨の間に」と「私も老いさらばえてしまったむなしく物思いをしてこの世を生きながらえる間に」の二つの意味が含まれており、おおむね女性の老いの嘆きを詠んだものと解釈される。しかしながらこの和歌には「老いた」だとか「苦しい」などの直接的な語は使われておらず、「わが身世にふる」の一句と「ふる(降る/古る)」「ながめ(長雨/眺め)」の二つの掛詞を用い、前半部分の花の移ろいに女性の半生を写して、その老いていくことの嘆きを表現している。まさに技巧的な和歌といって差し支えないだろう。

一方で篁の和歌は、本稿で見てきた通り、「おとろへ」だとか「嘆かれぬ」など直接的な表現をしており、さらに具体的な語を使いつつもそれを掛詞や縁語と言った技法にかける歌は見られなかった。その点でいえば、篁の和歌は『古今和歌集』の典型と言われる和歌とは対照的と言えるだろう。

五・古体的特徴と新体的特徴

しかしながら、典型と言われる和歌と対照的だからといって『古今和歌集』にそぐわないかというところではない。むしろ篁の和歌は『古今和歌集』

にとつて非常に歓迎されたものだと考えている。まず『古今和歌集』はその中の「真名序」や「仮名序」に見えるとおろ、衰退してしまつた和歌の文化をいま一度盛り上げようとして編纂されたものである。『古今』の名からもわかるとおろ、そこには古の『万葉集』への憧れと、それを継承し新しい和歌文化を築き上げようという意識が見て取れる。仮に先に挙げた小野小町に代表される『古今和歌集』の典型と言われる和歌たちが(『古今和歌集』の時代から見た)「新しい和歌」とするならば、篁の和歌は古い特徴と新しい特徴を併せ持つ和歌なのである。

まず古体的特徴として、先に見てきたような写実的で率直な詠みぶりがある。これは『古今和歌集』でいう「たをやめぶり」「技巧的」と同じようなもので、『万葉集』では「素朴」「雄健」「写実的」「ますらをぶり」などの特徴が挙げられる。さらに篁の和歌に見える語句には「八十島」「海人の釣り舟」「人の知るべく」など平安時代以前にも見られる語が使われている。特に2の歌に顕著に見られ、指摘も多くある。

次に新体的特徴として、三章で扱つた対比や外来的思想の輸入などの理知的な詠みぶりを挙げたい。また、これは篁の和歌自体の特徴ではないが、篁のあとの時代に篁の表現を踏襲した和歌が出てくることを強調しておきたい。

篁の表現を踏襲したであろう作品は数多くあるが、本稿では特に『古今和歌集』に見られる1の和歌に影響を受けたであろう和歌について述べる。『古今和歌集』には1の和歌の前に一つ、後ろに二つ「梅と雪がまざりあつて区別がつかない」という主題の作品が続いている。(高田裕彦2009『新版古今和歌集現代語訳付き』角川ソフィア文庫より引用。今後の引用を簡便にするためBCDとする)

B 梅の花それとも見えさかたの天霧る雪のなべて触れば
この歌は、ある人のいはく、柿本人麿が歌なり

C 雪のうちの梅の花をよめる
梅の香の降りおける雪にまがひせば誰かことごとわきて折らまし

D 雪のふりけるを見てよめる
雪降れば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし

このうち作者が判明しているのはC(紀貫之)とD(紀友則)である。Bは左注に「柿本人麿が歌なり」とあるが明証はない。しかし、同じような主題で作られた歌が四首続けてとられることから『古今和歌集』において一種伝統の自然表現になつていただろうと推測できる。篁はこのような自然表現にさらに花の香りを詠みこみ、貫之ら選者の時代よりも百年ほど早く詠んでいたのである。

もう一つ篁の1の和歌の影響を強く感じる和歌が左の和歌である。(高田裕彦2009『新版古今和歌集現代語訳付き』角川ソフィア文庫より引用。今後の引用を簡便にするためEとする)

E 春の歌とてよめる
花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

作者は良岑宗貞、六歌仙の一人として知られる僧正遍昭の出家前の名である。宗貞が生きたのは弘仁七年(816)から寛平二年一月(890)、篁が生きたのは延暦二十一年(802)から仁寿二年十二月(853)であるから、1とEどちらが先に詠まれたものかは明確にはわからないが、宗貞が篁より十四歳年若いことや、「霞が隠す」「風に盗んでこさせる」といった1の和歌に比べて手の込んだ発想が見られることから、断言することはできないが、宗貞が篁の和歌を踏襲したと思われる。

六・古今和歌集の中の篁

前項では篁の和歌が後の和歌に与えた影響について延べたが、次に篁の生きた時代と和歌の入集数について述べたい。その際に『古今和歌集』の時代区分について扱うがここでは左のようにする¹⁰。

第一期 読み人知らずの時代(849)

第二期 六歌仙の時代(850～890)

第三期 選者の時代(891～945)

篁はこの中の読み人知らずの時代に属している。各時代の和歌数は第三期が一番多く、次に第二期、第三期と時代が新しくなるにつれ増えていく。作者が判明している和歌の中で、篁の入集数(六首)は第一期では柿本人麻呂(七首)に次ぐ二番目に多い入集で、第二期まで含めても五位、『古今和歌集』全体では十五位の入集数である。また柿本人麻呂は飛鳥時代の人物であるから、平安の初め(桓武朝～仁明朝)特に唐風の文化が栄え、和歌が一時衰退した時代を生きた人物では最多である¹¹。『古今和歌集』が衰退してしまった和歌文化の再興をもくろみた歌集であることを踏まえると、このような時代に古い形式を残しつつ、優美で新しい表現をした篁は、古きを継ぎ新しい道を興そうとした『古今和歌集』の選者たちにとって、ある種の理想の歌人として独自の地位に立っていたのではないだろうか。

七. おわりに

以上、『古今和歌集』に収録された篁の和歌を、その表現の特徴と入集数、そして『古今和歌集』の持つ「古代への憧れ」を手がかりに、篁の和歌の内容を分析し、『古今和歌集』における篁の位置づけを論じてきたが、そこからうかがえるのは、篁の和歌が『古今和歌集』にとつて、古い形態を残しつつ、いち早く新しい表現を取り入れた鎗矢的存在であるということである。最後に、拙い論ではあるが、本稿が今後小野篁の和歌、あるいは小野篁自身に興味を持つきっかけになれば幸いである。

¹ 新潮社編 2002 『歴史小説の世紀 天の巻』新潮文庫 35・56頁

² 非常に簡素ではあるが、CINii Researchのフリーワード検索で「小野篁」と検索したところ117件の論文がヒットした。その全てに目を通してはいないが、私の知る限り

では歴史的事跡を検討するものは(抄録で判断したものも含め)8件ほどであった(仁藤智子2020「小野篁関係史料集成」正史編)国士館大学文学部人文学会国士館人文学10巻115-132頁。岩井美奈2018「小野篁の研究」フェリス学院大学国文学会玉藻52巻103-127頁(これは歴史的事跡のみでなく伝承も扱ふ)。仁藤智子2017「二人の東宮恒貞・道康と東宮学士小野篁」歴史書から見た小野篁国士館大学文学部人文学会国士館人文学7巻155-164頁。黒木香2007「史料に記された人物像」小野篁薨伝をめぐって「広島平安文学研究会古代中世国文学23号」2-5頁。など。対して『篁物語』について扱ったものは16件、冥官伝説や隠岐の伝承、寺社縁起などを扱ったものが42件、『篁物語』以外の創作や説話を扱ったものが11件、和歌を扱ったものが6件、漢詩を扱ったものが1件、タイトルや抄録などで判断がつかなかったものが14件、『小野篁歌字尽』について扱ったものが14件だった。また、書籍に関して、小野篁の事跡を扱った本は遣唐使関連の書籍や佐伯有清1992『人物叢書新装版伴善男』吉川弘文館(善愷訴訟事件および伴善男との関係について言及がある)などがあるが、現状小野篁の生涯を網羅的に扱った書籍は繁田信一2020『小野篁』その生涯と伝説』教育評論社のみである。

3 平野由紀子1988『小野篁集全釈』風間書房19-26頁に詳しい。

4 今村浩子2017「小野篁」わたの原」歌再考…詠歌年次、『万葉集』歌との関わりを中心に「札幌国語研究」北海道教育大学札幌校国語国文学会・札幌編22号41-58頁。川村晃生1987「八十島かけて」考慶應義塾大学国文学研究室三田國文8号17-21頁。など。

5 篁がその崩御にあつたのは、桓武(篁5歳、平城(篁23歳)、淳和(篁39歳)、嵯峨(篁41歳)、仁明(篁49歳)の五代である。篁が仁明天皇に近かつた(仁明朝に蔵人頭や参議に就任していた)ことや、『日本文徳天皇実録』の仁寿元年三月壬午の条に藤原良房が仁明天皇を偲ぶ法華経会を開いた折に「公卿大夫」が詩歌を以て仁明天皇を追慕し、その死を嘆いたと記述があることから、明証はないが、4の歌を仁明天皇に寄せたものと解釈されることが多い。(小林和彦1978「小野篁、その人と和歌」反骨性と屈折性」北海道教育大学紀要第一部A人文科学編28巻2号9-23頁参考)

6 『続日本後紀』承和五年十二月己亥の条。『日本文徳天皇実録』仁寿二年十二月癸未の条参照。

7 小林和彦1978「小野篁、その人と和歌」反骨性と屈折性」北海道教育大学紀要第一部A人文科学編28巻2号9-23頁より引用。注5のように4の歌を良房主催の法会の折のものとして述べている。

8 『古今和歌集』仮名序の「略」いにしへよりかく伝はるうちにも、ならの御時よりぞ広まりにける。(略)この人々をおきて、またすぐれたる人も、呉竹のよよに聞こえ、片糸のよりよりに絶えずぞありける。これより先の歌を集めてなむ、万葉集と名づけられたりける。(略)よろづの政をきこしめすいとま、もろもろのこをすてたまはぬあまりに、いにしへのこをも忘れじ、旧りにしこをも起こしたまふとて、今も見そなはし、後の世にも伝はれとて(略)や、真名序の「略」昔平城天子詔「侍臣、令撰万葉集」。自爾以来、時歴三十一代、数過三百年。其後和歌、棄不被採。(略)思継「既絶之風」、欲興「久廢之道」。(略)「などから『万葉集』への意識や新しい和歌文化を築く事への意欲が見て取れる。(高田裕彦2009『新版古今和歌集現代語訳付き』角川ソフィア文庫より引用。)

9 今村浩子2017「小野篁」わたの原」歌再考…詠歌年次、『万葉集』歌との関わりを中心に「札幌国語研究」北海道教育大学札幌校国語国文学会・札幌編22号41-58頁。川村晃生1987「八十島かけて」考慶應義塾大学国文学研究室三田國文8号17-21頁。など。

10 小沢正夫1990『作者別年代順古今和歌集増補版』明治書院を参考に、第一期を文徳天皇の即位年まで、第二期を僧正遍昭の死まで、第三期を紀貫之が死ぬ945年までとする。ただし、『作者別年代順古今和歌集増補版』では第一期の始まりを809年としている。本稿では809年以前の柿本人麻呂の歌を扱っているので始まりの時期については特定しない。

11 入収集の内訳は以下の通り。(小沢正夫1990『作者別年代順古今和歌集増補版』明治書院を参考。また集計したのは作者が判明している歌のみである。)

1. 紀貫之100首(第二期)
2. 凡河内躬恒60首(第三期)
3. 紀友則46首(第三期)
4. 壬生忠岑37首(第二期)
5. 素性法師36首(第二期)
6. 在原業平30首(第二期)
7. 伊勢22首(第二期)
8. 藤原敏行19首(第二期)
9. 小野小町18首(第二期)
10. 僧正遍昭17首(第二期)

- 1 1. 藤原興風 17首(第三期)
- 1 2. 清原深養父 17首(第三期)
- 1 3. 在原元方 14首(第三期)
- 1 4. 大江千里 10首(第三期)
- 1 5. 平貞文 9首(第三期)
- 1 6. 柿本人麻呂 7首(第一期)
- 1 7. 在原滋春 6首(第三期)
- 1 8. 源宗于 6首(第三期)
- 1 9. 小野篁 6首(第三期)

参考文献

- 高田裕彦 2009 『新版古今和歌集現代語訳付き』角川ソフィア文庫
- 小林和彦 1978 「小野篁、その人と和歌：反骨性と屈折性」北海道教育大学紀要第一部 A 人文科学編 28 卷 2 号 9-23 頁
- 平野由紀子 1988 『小野篁集全釈』風間書房
- 小沢正夫 1990 『作者別年代順古今和歌集増補版』明治書院
- 今村浩子 2017 「小野篁「わたの原」歌再考：詠歌年次、『万葉集』歌との関わりを中心に」札幌国語研究／北海道教育大学札幌校国語国文学会・札幌編 33 号 21-22 頁
- 川村晃生 1987 「八十島かけ」考慶義塾大学国文学研究室三田國文 8 号 17-21 頁
- 繁田信一 2020 『小野篁：その生涯と伝説』教育評論社
- 森田悌 2010 『続日本後紀(上)』講談社学術文庫
- 経済雑誌社 1897 『国史大系第三卷』経済雑誌社
- 新潮社編 2002 『歴史小説の世紀 天の巻』新潮文庫
- 国際日本文化研究センター 公開データベース(和歌)
- CiNii Research

謝辞

本稿を執筆するに当たって、N/S 高等学校研究部人文科学グループアドバイザーおよび先輩の方々にご助言を頂いた。ここで深く感謝申し上げます。